

講義「青年心理学」における映像教材の活用

— 実践報告 —

落合信寿¹

1. はじめに

心理学教育においては、授業等での映像教材の利用に対するニーズが高く、広範な領域の授業等で活用されている^{1,2)}。また、専門性の高い教育用教材として製作された映像だけではなく、教育用教材として製作されたものではない映画やTVドラマ等の映像を教材として心理学関連の授業に取り入れている事例も報告されている^{3,4)}。

筆者が講義を担当している教育学部児童教育専攻の講義科目「青年心理学」においても、授業の一部に映像教材の視聴を取り入れている。それらの映像は、もともと心理学の教育用教材として製作されたものではなく、ドラマ、ドキュメンタリーといったTV放送番組を録画・編集したものを教材として使用している。本報では、講義における映像教材の活用について、具体的な実践内容を報告する。

2. 2014年度講義で使用した映像とその活用例

シラバスに記載した2014年度講義の授業計画を表1に示す。このうち、映像教材を使用したのは、第3回、第7回、第10回、第12回、第13回、第14回の計6回である。各講義回で使用した映像を表2に示す。第7回を除

¹公益財団法人労働科学研究所
e-mail: nobu0728@fc.hakuoh.ac.jp

表 1 児童教育専攻「青年心理学」の2014年度授業計画

講義回	講義テーマ
第1回	イントロダクション
第2回	ライフサイクルの中の青年期
第3回	青年期とアイデンティティ
第4回	青年期の思考と感情（1）
第5回	青年期の思考と感情（2）
第6回	思春期の身体発達
第7回	青年期の悩み
第8回	青年期と恋愛（1）
第9回	青年期と恋愛（2）
第10回	青年期における友人関係
第11回	青年期と親子・家族関係（1）
第12回	青年期と親子・家族関係（2）
第13回	青年期における心理・行動の問題（1）
第14回	青年期における心理・行動の問題（2）
第15回	まとめ

表 2 2014年度講義で使用した映像教材の一覧

講義回	使用した映像	種類	放送年	放送局	講義・レポート 課題との関連
第3回	軽傷ではない	ドキュメンタリー	2014年	長崎文化放送 (テレビ朝日)	青年期の同一性達成における危機の問題を考える題材
第7回	イグアナの娘	ドラマ	1996年	テレビ朝日	青年期の悩みとその克服について考える題材
第10回	ネットいじめに向き合うために	ドラマ	2008年	NHK Eテレ	友人関係におけるCMC(Computer Mediated Communication)の問題を考える題材
第12回	彷徨う少女たち ～君は、ひとりじゃない～	ドキュメンタリー	2012年	テレビ朝日	児童虐待を受けた青年の自立の問題を考える題材
	行き場のない若者たちを どう支えるか ～自立援助ホームの試み～	ドキュメンタリー	2010年	NHK Eテレ	
第13回	14歳 もう一度教室へ	ドキュメンタリー	2012年	NHK Eテレ	不登校の問題を考える題材
第14回	中学生日記 決意(前編)	ドラマ	2007年	NHK Eテレ	いじめの傍観者の問題を考える題材

き、これらの講義回では、前半に通常の講義を行い、後半に映像の視聴を実施した。受講者は映像の視聴後、映像及び授業内容に関連した課題について授業時間内に小レポートを作成し提出した。

なお、本講義では毎回講義内容や図表等をまとめた資料を配布しており、映像の視聴を行う講義回では、使用する映像のタイトル、あらすじや授業内レポート課題の内容を配布資料に掲載し、適宜参照できるように配慮している。本報では表2の中から3つの講義回を取り上げ、使用した映像とレポート課題、授業内容との関連等について具体的に説明する。

1) 第3回：青年期とアイデンティティ

映像教材：「軽傷ではない」

あらすじ：プロのトランペッターになる夢を実現するため、母親の運転する車で音楽大学の推薦入試に向かっていた長崎県立佐世保東翔高校3年の前川希帆さん。自宅を出て数分後、酒気帯びと無免許運転の男が運転する車に正面衝突された。事故の衝撃で気を失い、気付けば病院の診察台の上。唇や頬など20ヵ所以上を縫合し、演奏に欠かせない前歯4本を失った。「またトランペットが吹きたい」と願う希帆さん。しかしその道程には幾多の試練が待ち受けていた…。^{注1、2)}

課題内容：授業内容を参考に、青年期に直面した「危機」といかに向き合うか、という観点を踏まえ、映像についてのあなたの感想を述べてください。

第3回は、Eriksonが青年期の心理社会的発達課題として提唱した同一性(identity)と同一性拡散(identity diffusion)の問題をテーマに、同一性の状態を関与(commitment)と危機(crisis)の2次元で捉えたMarciaのステイタスモデル等を取り上げている。本講義回での映像は、青年期の同一性達成において危機の経験の重要性を理解するための具体的事例として

取り上げている。

使用した映像「軽傷ではない」は、長崎文化放送が製作した約30分のドキュメンタリーで、テレビ朝日系列のドキュメンタリー番組「テレメンタリー 2014」で放送されたものである。主人公の女子高生前川希帆さんは、交通事故で前歯を失ってしまい、それが目標である音楽大学への進学に大きな障壁となったが、周囲の人々に支えられながら諦めずに努力し、ついに音楽大学への進学を実現する。

この映像は2014年5月に放送されたもので、2014年度後期の講義で初めて使用した。従来、本講義の前半では映像教材は使用していなかった。しかし、比較的早い段階で受講生にとって共感性の高い映像を教材として用いることは、受講に対する動機付けを高める上で重要であると考えた。このドキュメンタリーの主人公は高校3年生の女子生徒であり、彼女が苦難の経験を経て、晴れて大学に入学するまでの姿が映し出されている。本講義の履修者は1年生が多く、特に幼児教育・保育コースの授業では履修者の大半が1年生の女子である。同年代の女子が大学進学という目標に向けて努力する姿は、とりわけ入学してからまだ日が浅い1年生にとっては共感できるものであろうと思い、教材として採用した。

本講義において、この映像を教材として利用する際の留意点は、このドキュメンタリーが飲酒運転事故の被害者を取り上げたもので、飲酒運転撲滅という明確なメッセージ性を有している点である。主人公の前川さんも映像の中で飲酒運転の問題についてコメントを発している。しかしながら、異なる観点からこの映像を視聴してみると、事故で前歯を失うという危機を経験しながらも、危機的状況から逃げたり諦めたりすることなく目標に向かって努力していく前川さんの姿は、同一性獲得の過程における危機の問題を考察する具体的事例として適していると考えた。提出されたレポートから、大半の受講生は飲酒運転の問題に過度にとらわれず、ほぼ課題の意図に沿ってこの映像について考察していたが、飲酒運転についての言及が大半を占めた受講生も若干いた。この点については、視聴前の教示を工

夫する等の改善が必要である。

2) 第7回：青年期の悩み

映像教材：「イグアナの娘」

あらすじ：付録参照

課題内容：「イグアナの娘」のビデオを見て、自分が思ったこと、感じたこと、考えたことを自由に述べてください。ただし、その中に、下記①～③に対する自分自身の考察を含めてください。

- ① 主人公の青島リカに対して共感できる点、共感できない点は何か、その理由を併せて述べてください。
- ② 主人公の青島リカにとって、友人の三上伸子の存在はどのような意味を持つと思うか、あなたの考えを述べてください。
- ③ 主人公の青島リカが自分の抱えている問題を克服していくためにはどうしたらよいかと思うか、あなたの考えを述べてください。

第7回は他の講義回とは異なり、授業時間のほぼ全てを映像の視聴に用いて、授業時間外に作成するレポート課題を課している。繊細で多感な青年期には、概して多くの人が青年期特有ともいえる悩みをもつ。悩み事は千差万別であろうが、悩みと向き合いそれを克服していこうとする努力が人間の成長につながることは、誰しもが共通しているであろう。

本講義回は、青年期の悩みと向き合いそれを克服していく例として「イグアナの娘」を取り上げている。レポート課題は一定の視点を設けてはいるものの、できるだけ自由な感想を述べてもらいたいと考えて課題内容を設定している。

「イグアナの娘」は漫画家・萩尾望都氏の短編漫画を原作とした連続TVドラマ（脚本は岡田恵和氏）であり、テレビ朝日系列で1996年に放送され

た。ドラマは全11回の1時間番組であるため、教材化に際しては、主人公の青島リカとその親友となる三上伸子の2人が関わりあう場面を中心に、約80分に編集したものを使用している。

主人公の青島リカは、幼少時の経験から鏡に映る自分の顔が醜いイグアナに見えるようになり、それが原因となって内向的な性格になり、友人をつくることもできなかった。自分は幸せになれないと思い込んでいたリカであったが、ある出来事をきっかけに三上伸子と親しくなる。三上伸子の影響を受けてリカの心理や行動に段々と変化が見られ、辛い経験を経てもなお、自分は幸せになりたいと強く想い描くようになる。

このドラマは問題を抱えた少女の心理的成長過程を描いているが、初回と最終回とで視聴率が2倍以上に伸びる等、視聴者の評価が高く、筆者自身も本放送時に視聴して深い感銘を受けた思い入れの強い作品である。特に、主人公・青島リカと親友・三上伸子が登場する場面では、印象的な台詞や情景描写が幾つかあり、編集した映像の中にも収録している。

一方で、このドラマはファンタジー性の強い作品であり、ドラマの一部を切り出して分かりやすい内容に編集するのは難しい。教材としての導入前に、複数の学生に編集した映像を視聴してもらい映像内容の理解度についてチェックを行っているが、それでもなお分かりにくい場合を想定して、配布資料にあらすじ（付録参照）を掲載して適宜参照できるように配慮している。以前はアナログ映像を約70分に編集したものを教材として使っていたが、現在は、分かりやすさ等により一層配慮し、地上波デジタル放送で再放送された録画を基に、80分に再編集したものを使用している。

「イグアナの娘」を心理学の映像教材として最初に使用したのは2005年のことである。本講義を担当する以前から他大学の講義でも教材として使用しており、10年近い使用実績を有する。昔のTVドラマであるが、主人公・青島リカ役を演じた菅野美穂氏をはじめとして、主要な登場人物は現在でも活躍している俳優が多い。

導入当初は、とりわけ主人公に対する共感性が高く、受講者の反響の大

きさに高い教育効果を感じて、長年にわたり映像教材として使用してきた。しかし、2014年度のレポートを読むと、以前よりも強い印象や高い共感性を持つ学生が相対的に少なくなってきたように感じられた。ドラマが制作されてから18年程経過し、最近では映像がかなり古めかしく感じられるようになったのもその一因であろうか。この点は今後の検討を要する。

3) 第12回：青年期と親子・家族関係（2）

映像教材1：「彷徨う少女たち～君は、ひとりじゃない～」

あらすじ1：誰にもいえない悩みを抱え、家庭にも学校にも居場所を見つけれない少女達がいる。NPO団体「BONDプロジェクト」は、そうした少女達の声に耳を傾け、支援する団体。竹下奈都子さん（通称：なっちゃん）は、ここで2年前から相談員を務めている。寄せられる相談で後を絶たないのが、肉親による性的虐待被害の訴え。ほとんどは、拒むことも、訴え出ることもできず、長年隠し続けている。彼女達のために、なっちゃんができることとは一。なっちゃんと少女達の、葛藤の日々を綴る。^{注3)}

映像教材2：「行き場のない若者たちをどう支えるか～自立援助ホームの試み～」

あらすじ2：深刻化する児童虐待。児童養護施設に保護された子どもたちも、成長すれば施設を出て自立を迫られる。しかし、就職難や、虐待で受けた心の傷が壁となり、仕事に就けず孤立する若者は多い。大分で夫婦が運営する自立援助ホームは、そんな若者に居場所を提供、自立を手助けしている。厳しい経営の中、精いっぱい若者を支える夫婦と、自立しようと必死にもがく若者たちの姿を通して「今どんな支援が必要とされているのか」を考える。^{注3)}

課題内容：2つのドキュメンタリー映像を見て、児童虐待を受けた青年の

自立の問題についてどう思ったか、あなたの考えを述べてください。

第12回は親子関係に関わる問題として児童虐待を取り上げている。児童虐待の多くは児童期までの子どもに関わる問題であり、青年心理学の講義で取り上げる中心的な論題であるとは言い難い。しかしながら、虐待を受けた経験のある子どもたちが青年期に達し、やがて自立を迎える段階でどのような問題に直面するかについて知り考察を深めることは、青年心理学の講義で取り上げるべき重要な論題であろう。それを考える題材として、本講義回では約30分のドキュメンタリー映像を2つ取り上げている。

本講義回のみ2つの映像を使用した理由は以下の3点である。

- ① 児童教育専攻の学生にとって、児童虐待は自己の専門性と関連の深い問題であるため、なるべく多くの題材を用いて考察する機会を設けたい。
- ② 映像教材1は性的虐待、映像教材2は主にネグレクト（育児放棄）の問題であり、映像の中で取り上げている児童虐待の行為類型が異なる。
- ③ 映像教材1はNPOの支援団体、映像教材2は自立援助ホームが舞台であるが、どちらもこの映像を見て初めてその存在を知ったという受講者が多く、新たな知識の獲得という側面においても重要である。

映像教材1の「彷徨う少女たち～君は、ひとりじゃない～」は、テレビ朝日系列のドキュメンタリー番組「テレメンタリー 2012」で放送された。性的虐待という社会的にタブー視されている問題を正面から取り上げており、映像の中では虐待の実態を訴える少女の声など衝撃的な場面も出てくる。本講義は例年女子の履修者が多いため、最初は教材としての使用を躊躇したが、導入初年度の女子学生のレポート等からは、同性であるが故に理解し共感できる部分が大きかったためか、映像に対する反響の大きさがうかがわれた。故に、その後も継続して使用している。

この映像では、「なっちゃん」と呼ばれるNPO団体の女性相談員が支援した2人の少女の事例を中心に取り上げている。2人目の少女の事例では、虐待していた父親の元を離れて自立援助ホームに入居するまでの過程が描かれている。その少女は、最初は誰も信じることができず、NPO団体が提案した自立援助ホームへの入居にも消極的であった。しかし、性的虐待という救いようのない状況から脱却し、新しい生活を構築するために支援を惜しまなかった「なっちゃん」だけには心を開き、ついに彼女の勧めに従い自立援助ホームへの入居を決意する。ホームへ向かう車の中で「なっちゃん」に寄り添う少女の姿は、大変印象的なシーンである。

映像教材2の「行き場のない若者たちをどう支えるか～自立援助ホームの試み～」は、NHK Eテレの番組「福祉ネットワーク」で2010年に放送された。大分県で自立援助ホームを経営する澤田夫婦の活動を追いかけたものである。自立援助ホームは、義務教育終了後15歳から20歳までの児童が入所できる施設で児童虐待の被害者が多い。澤田夫婦が経営するホームでも、養育放棄等の理由により児童養護施設で育った子どもが、施設を出た後行き場を失い入居してくる。

このドキュメンタリーは、まもなく成人を迎えホームを出て自立しなければならない「タケシ」という青年に焦点を当て、彼が自立するまでの歩みと彼に寄り添う澤田夫婦の姿を描写している。「タケシ」は、来るべき自立に向けて真面目に工場のアルバイトを勤めた努力が認められて、成人を期にその工場で正社員として雇用されることが決まった。安定した職を得て自立に向けて順調に進んでいた「タケシ」だったが、ある日から、頭を壁に打ち付けるという自傷行為を繰り返すようになる。やがて自立に対する不安を克服して「タケシ」はホームを卒業していく。ドキュメンタリーの終盤、ホーム長の澤田さんが言う「本当に理解してくれる人が一人でもいれば、彼らはずっとつながっていける。社会の中で生きていける」という言葉は、当事者だけが語ることのできる重みを感じる。

2つの映像の視聴に際しては、自立援助ホームを接点として連続性を持

たせるように配慮している。すなわち、映像教材1を先に視聴し、その中で出てきた自立援助ホームというキーワードについて、どのような施設であるかを具体的に知るといった流れで映像教材2の視聴が続いている。

3. おわりに

本報では、映像教材を使用した6つの講義回のうち3回を取り上げ、その中で使用した4つの映像教材の内容と講義での活用について具体的に説明した。これらを含め2014年度は表2に示した7つの映像教材を使用した。必ずしも教育効果に十分な手ごたえを感じたものばかりではなく、改善の必要性を感じている教材も含まれる。

また、映像教材の効果については、レポート内容等から判断する主観的かつ定性的な評価だけに依存するのではなく、アンケート等による受講者側からの評価を実施することにより、より客観的かつ定量的な効果測定が可能になると考えられる。この点については、今後の検討課題である。

付録

配布資料に掲載した「イグアナの娘」のあらすじ^{注4)}

長女・青島リカ（菅野美穂）の誕生に喜ぶ父・正則（草刈正雄）だが、妻・ゆりこ（川島なお美）は沈んでいた。ゆりこの目にはリカがイグアナにしか見えないのだ。やがて妹のまみ（榎本加奈子）が生まれ、ゆりこは人間に見えるまみだけを偏愛するようになる。リカはひっそりと目立たない性格に…。そして、ある日、「あの子はガラパゴスのイグアナなのよ」と叫ぶゆりこの声を偶然聞いてしまったリカは、鏡に映った自分の姿もイグアナに見えるようになってしまう。ある日、母親の愛情を拒絶されたリカは自殺を試みるが、同級生の岡崎昇（岡田義徳）に助けられる。それ以来、リカは昇にほのかな恋心を抱くようになった。

9年の月日が流れ、リカは高校3年生、まみは高校1年生に成長。同じ

高校に通う二人だけだ…。

リカは進路相談表を落としてしまう。偶然それを拾い、リカが昇と同じ大学志望であるのを知った同級生のかおり（小嶺麗奈）は、クラスメートの前でリカがかつて自殺を図った過去を暴露する。ショックで思わず教室を飛び出したりリカは、河原で転校生の三上伸子（佐藤仁美）に出会う。「貴方が悪いと思う」と指摘する伸子に、リカは…。

中間試験の時期、そしてリカの誕生日も近付いていた。伸子から誕生日の夢は？と聞かれたリカは、「好きな人と遊園地に行くこと」と答える。図書館で偶然昇に出会ったりリカは、試験勉強を教えてほしいと昇から頼まれる。試験終了後、リカは、勉強をしてくれたお礼にと、昇に遊園地に誘われるが…。

遊園地で昇に「今のおまえは正直好きじゃない。昔の元気なおまえに戻ってほしい」といわれたリカは、自分を変えたいと考えはじめる。伸子にその事を話すと、そもそもリカを暗くしてしまった原因は一体何なのか教えてほしいと言われる。しかしリカにはどうしても打ち明ける事が出来ない。そんなリカに対して伸子は…。

リカは勇気を出して昇を映画に誘った。当日、駅で昇を待つリカ。だが、そこに現れたのは母・ゆりこだった。昇がデートに来られないことを告げに来たのだった。帰り道、ゆりこに「昔、あなたを殺して自分も死のうとした事がある」と告げられ、リカはショックで街を徘徊する。知らせを受け必死で街中を探し回ってリカを見つけた伸子は、自分の家にリカを連れて帰るのだった。翌日、リカは伸子の母親から、伸子もかつて心を閉ざしていた事を聞かされる。伸子に何もかも話す事を決意したりリカは、戸惑いながらもついに伸子に「私はイグアナなの…」と打ち明ける。

家に戻ることを決めたリカは、伸子と海を見に行く約束をした。当日、約束の時間に遅れそうになった伸子は、無理に横断歩道を横切り、事故に遭い亡くなってしまう。リカは伸子の死を自分のせいだと思い込み、再び心を閉ざしてしまう。伸子の家を訪れたリカは、伸子の母親に諭される。

帰り道、失意のまま歩くりカに伸子の恋人・津島が声をかけた。津島は伸子がかつて自分に宛てた手紙をりカに渡すためにやってきたのだった。

注

- 1) 各映像のあらすじは配布資料に記載したものと同一であり、そのほとんどは番組ホームページから引用したものである。
- 2) 本映像のあらすじは、テレビ朝日放送テレメンタリーホームページ〈<http://www.tv-asahi.co.jp/telementary/contents/backnumber/0562/>〉より引用した。
- 3) あらすじは番組ホームページから引用したものであるが、2015年3月の時点で既に当該ページは削除されている。
- 4) あらすじは「イグアナの娘」DVD-BOX（2001年、パイオニアLDC株式会社）に記載された内容を適宜編集し作成した。

参考文献

- 1) 伊藤秀子・宮本友弘・宮本正一・大野木裕明・中澤潤・魚崎祐子（2004a）. 心理学教育における映像教材の利用とニーズ (i) - 利用状況の分析 - 日本心理学会第68回大会発表論文集, 1170.
- 2) 伊藤秀子・宮本友弘・大野木裕明・中澤潤・宮本正一・魚崎祐子（2004b）. 心理学教育における映像教材の利用とニーズ (ii) - ニーズの分析 - 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 506.
- 3) 米谷淳（2001）. 心理学教育への映像教材の活用 研究報告（放送大学）, 26, 311-321.
- 4) 瀬戸美奈子（2013）. 心理学の授業における映画教材の活用 大学教育研究：三重大学授業研究交流誌, 21, 41-45.